

親魚養成技術開発試験 (ヤイトハタ)

今吉雄二・今村昭則・池田祐介

【目的】

養殖・放流対象種の多様化を目的とし、本県ではこれまで利用されていなかったハタ類(ヤイトハタ)の親魚養成技術開発を行う。

【方法】

種苗生産用受精卵の安定的確保を目標に、以下の方法で親魚養成を開始した。

(1)親魚履歴

垂水市海潟沖で漁業者により畜養されていたヤイトハタ5歳魚14尾を購入し、11月1日に本センターへ搬入した。

(2)養成

搬入当初(11月1日～12月1日)は飼育実験棟10KL水槽で飼育し、餌付けを行った。

12月2日以降は来期の採卵に備え、魚類棟50KL水槽へ移槽した。

(3)給餌

冷凍サバを5cm角にカットして給餌。給餌量は、1尾当たりの魚体重を8kgとし、総魚体重の約5%相当となる6kg(3kg×2回)のサバを週2回に分けて給餌することを基本とした。

冬期は水温の低下に伴い摂餌量が減少するため、直近の摂餌状況を考慮し、適宜調整した。

(4)その他

10KL水槽から50KL水槽への移槽時に、ハダムシ対策として淡水浴を実施した。

また、50KL水槽では銅イオン発生装置によるハダムシ防除対策を講じた。

【結果及び考察】

(1)養成

10KL水槽に搬入後、数個体が遊泳異常を呈し、うち1個体が斃死した。海面生け簀からの取り上げの際のダメージと思われ、今後の移槽作業等には注意が必要である。

また、ヤイトハタは、並行して養成しているオオモンハタのように攻撃行動による斃死は発生しなかった。この点からは飼育しやすい魚種であると考えられた。

(2)給餌(摂餌状況)

長期間畜養されていた個体だったためか、10KL水槽への搬入、50KL水槽への移槽による摂餌への影響は見られず、いずれの移動後も初回の給餌分から摂餌していた。

給餌量の推移については下表のとおり。

表 給餌量の推移

期 間	給餌量	期間中の水温
11/7～11/14	6.0kg/週	23.0～21.8
11/18～11/25	4.0kg/週	22.0～20.0
11/28～2/10	3.0kg/週	20.7～15.3
2/13～3/30	2.0kg/週	15.5～17.0

水温が22℃を下回り始めた11/14の給餌分から残餌が出始めたため、給餌量を週当たり4.0kgとした。それ以降、段階的に減らし、2/13からは週当たり2.0kgとした。

水温低下に伴い、餌投入時に全く反応を示さなくなるが、残餌をそのまま置いておくと夜間に若干摂餌している様子なので、冬期は残餌を一晩放置し、翌朝に回収した。

(3)その他

淡水浴の際、多数のハダムシの寄生が確認された。

現在、銅イオンによる防除対策を講じているが、今後も移槽時には必ず淡水浴を実施し、寄生によるストレス等を防ぐとともに、飼育下での寄生状況を常時確認することが必要である。